読者だより（会員コーナー）

先哲史料館にて　歴史講座始まる

二月に開館二十周年を迎えた大分先哲史料館が今年も歴史講座を始めた。第一回は「大友宗麟とキリシタン文化」と題して研究員の松原勝也氏がお話しされた。今後は次のようなタイトルで年間八回実施される。希望の方は講座開催日の一週間前に先哲史料館に申し込めばよいそうである。会場は大分県立図書館の二階のホールで開催されます。希望者は是非ご参加下さい。

・第二回八月五日（水）一三時三〇分
　豊後キリシタン史
　「マレガ文書と大分」
・第三回　九月二日　一〇時三〇分
　高校教科書に見る歴史上の人物
・第四回　九月三十日　一〇時三〇分
　江戸から明治の衣食住
・第五回　十月十四日　一〇時三〇分
　百姓達の幕末　黒船来航～
・第六回　十一月十八日
　陽だまりの樹と神様のカルテ
・第七回　十二月九日　一〇時三〇分
　麻田剛立　天文研究の生涯
・第八回　一月十三日　一〇時三〇分
　県内の文化財が語るもの

この他に記念講演会もあります。これは日曜日の一〇時三〇分からです。

九月二十日（日）若き日の重光葵
十一月八日（日）大分と長崎の医

ご希望の方はご参加下さい。

会誌の体裁について　お尋ねがありました。

会誌は今B6判です。各頁に二十五字×二十字で構成しています。そのため文字の大きさが九、五ポイントの大きさになっています。

最近、文字が小さすぎて会誌が読めなくなったという話を聞きます。

会誌をA4判にしたらとの意見もあります。また、従来からの大きさを変えない方がという意見もあります。史談会の拡大役員会で討議しましたが、結論的には従来通りとなりました。

現在、全体の活字を多少大きくしてはどうだろうかという意見も聞こえてきました。そこで、次号二二八号で実験的に活字を大きくしてみようかとも考えています。このことは理事会等で検討して戴きたいと考えています。例えば一ページの字数を二十五×二十を二十×十六程度に

したらと考えています。一原稿十ページ程度を十五、六ページに延長すれば可能となります。

A6判をA4判に変えれば現在の二冊体制が、従来のA6判三冊分の経費と同じとなります。現在のA6判二冊でしばらく行くこととなります。A6判二冊からA4判一冊にするか。現状維持かいろいろと考えられます。ご意見をお聞かせ下さい。

原稿についてのお願い

前回二二六号にて「原稿が少なくなってきている。」とのお知らせをしましたところ、数名の方から原稿を寄せて戴きました。大変ありがとうございました。

早速、編集委員会にて検討させて戴き、今回の二二七号にその一部を掲載させて戴きました。残念ながら全ての原稿を載せることが出来ませんでした。というのも、送られてきた原稿あるいは原稿に準ずるものの中に、なにをメインに原稿を作成しているのか、何を会員に伝えたいのかが分かりにくいものもありました。

従来の原稿は、佐伯市の状況がわかる新しい資料の発掘、これまでの研究等に対する考察、ご意見などが中心でした。また会員独自の聞き取りや調査をまとめた物。佐伯に関わる一家庭に残された資料、祖先の出来事等を事例を示しながら紹介するものでした。しかし、そういう資料はなかなか発見できません。

古文書の紹介、解釈等などもありましたがその解釈の難しさ、興味がかけ離れているものである等の理由で人気が今一つありません。その為最近では史談会が主催した佐伯市以外での研修報告や研究発表会、講演会等の報告を入れております。

このままでは、会誌の発行は難しくなります。一冊の会誌の編集には平均六十五頁から七十頁の原稿が必要です。次回二二八号は来年三月に発行する予定です。原稿締め切りは一月末となりますので、今から一つでも結構です、作成方よろしくお願いします。現在、原稿のストックはございません。

先輩の原稿に対して出版社から御講評を戴きました。

このご意見は、ある会員の方に寄せられた作品講評の一部です。

その原稿は昭和三十九年(一九六四)に謄写版原稿により史談に紹介された「朝鮮日々記」(羽柴弘・村井強氏共著)です。

この作品は臼杵城主太田飛騨守一吉に従って慶長の役に参加した従軍僧・慶念(けいねん)が朝鮮での戦いや陣中生活を記録した「朝鮮日々記」を羽柴・村井の両先輩が解読紹介した物でした。今回、某出版社から是非再版してはとのお話しがきたそうです。

出版社の方の講評の中には「佐伯史談

会の村井強氏が撮影した写真をもとに羽柴氏とともに、解読読み下したもの」を謄写版印刷した労作である。秀吉の文禄・慶長の役に関しては『立花宗茂朝鮮記』『清正記』『島津家高麗文書』などの記録が知られているが、その多くが従軍した武将のものである。一方『安養寺の朝鮮日記』と呼ばれていたこの『朝鮮日々記』は戦闘に拘わらず、専ら傷病兵の手当看護を担当した僧侶の記録である。しかも著者の慶念は従軍当時六十二才の高齢であった。その彼が九ヶ月にわたる永い陣中生活の毎日を一日も欠かすこと無く、旅の苦しさのすさまじさ、寒さひもじさの耐えがたさ、さては望郷の念やる方ない赤裸々な人間としての苦悩、その中で信仰の灯を燃やし続け克明に記したものである。殆ど毎日、和歌に托して日々の思いをまとめている。この貴重な資料を改めて人々に紹介し活字に残しておくことも大切であろうと思う。お二人の御労苦を活字にし後世の人々に是非とも読んで戴きたい。切に望みます。

今年はキリシタンブームかな？

昨年夏、ヨーロッパのバチカン図書館でキリスト教関連の文書マレガ文書が発見された。この事と臼杵市下藤地区で新たに発見されたキリシタン遺跡。この両者を結びつけるがごとき野津のリアンの存在等々。今、大分県のキリスト教関連行事が続々と花開いている。今年に入ってキリシタン関連講座が次々とひらかれています。

五月に別府史談会の講演『大分県下のキリシタン墓地』、津久見史談会の講演『豊後キリシタン』、

七月の『大友宗麟とキリシタン文化』、地方史研究会の研究発表『野津のリアンと下藤地区キリシタン墓地』、『大友・野津キリシタン』、地方史研究会講演会『キリシタン遺物と考古学的研究』

八月に行われる先哲史料館講座『マレガ文書と大分』とキリスト教関連の講演、研修会がたくさんあります。

多くの研究会や展示会がめじろ押し

平成二十七年度の各地の展示会が熱い中実施されています。

今後の展示についていくつか紹介します。

○重光家風韻―九月二十九日～

新杵築市誕生十周年を記念して「きつき城下町資料館」にて九月二十九日から十一月二十九日まで開催されます。

重光葵氏は、昭和二十年当時の外務大臣として降伏文書に調印した人です。戦後七十年目の今日平和を考える時の良き資料となり得ると思われます。合わせて十月一日（木）杵築市文化体育館で午後一時より関連記念講演会が行われます。問い合わせは杵築市教育会（〇九七八―六三―五五五八）にお願いします。

○若き日の重光葵企画展
期日　八月二十二日～十月四日
場所　大分先哲史料館
○戦後七十年記念　戦争と文化展
期日　七月二十四日から
　　九月二十三日まで
場所　大分県立歴史博物館（宇佐）
内容　戦争により人々の生活がどのように変化して来たかをテーマに軍事や政治以外の面から見つめます。
○大関ヶ原展～家康没後四百年
期日　八月七日～十月四日
場所　福岡市博物館
内容　徳川家康没後四百年を記念慶長五年の関ヶ原役の全貌を展示します。関ヶ原ゆかりの武将の甲冑や関ヶ原戦図屏風が展示されます。
※八月九日には『関ヶ原の政治史』、九月十三日には『関ヶ原戦陣図屏風を読む』の講演もあります。

表紙解説

宗麟原供養塔

今から四百三十七年前の天正六年十一月十二日、宮崎県川南町高城で繰り広げられた大友宗麟と島津義久の戦い豊薩戦争（耳川の戦い＝高城川合戦）の戦場の一角に建てられた『宗麟供養塔』です。

天正十二年（一五八四）高城合戦の七回忌に島津義久が施餓鬼を執り行い、宮崎城主上井覚兼に供養塔建設を命じている。覚兼は最初、高城地頭山田新助有信と財部（高鍋）地頭とに協力して作るように考えたが財部衆が反対した為、山田新助有信が独力で作ったものである。この地に六地蔵を建立「カンカン仏」と呼ばれていた。昭和八年に国の史跡となり名も『宗麟原供養塔』と呼ばれるようになった。六地蔵塔の碑文には干時天正十三年二月彼岸日　謹奉訓誦大衆妙典一千部為戦亡各霊、大施主山田新助と書かれている。

右側には迷故三界城　悟故十方空　北側面には本来無東西　何処有南北、背面に諸行無常　是生滅法　生滅々己寂滅為楽の文字が書かれている。

有信の敵味方を超えた博愛の精神を読み取ることが出来る。

編集後記

会誌第二二七号をお届けします。

今回は近世の古文書と明治初期佐伯の様子を取り上げて見ました。日帰り研修では福岡地区の大野城、水城の様子を紹介しました。次回原稿締め切りは一月末、発行は三月になります。ご意見をお待ちいたします。